

- 1 初旅の黒光りしてゐるブーツ
- 2 など言ひてねと返さるる初山河
- 3 口許の声に遅るる初電話
- 4 父の背を所狭しと寒灸
- 5 羽化するやうに大輪の寒牡丹
- 6 成人の日のネクタイをくづしけり
- 7 河豚食ふや官官接待ありし街
- 8 ラグビーの笛に大地の鎮まりぬ
- 9 雪うさぎ耳の奥より濡れてをり
- 10 紅梅を絵筆の先にふくらます
- 11 てのひらを薄氷として持ち帰る
- 12 しらうをの光ぶつかりあうてをり
- 13 浅はかな一夜もあらむ猫の恋
- 14 ひと渦に蒔蓐草の茹であがる
- 15 鳥ごゑに濡れはじめたる薄氷
- 16 ワグナーの楽劇の夜や遠雪崩
- 17 とは言へど楽しきことも二月尽
- 18 茶室いま春雪といふ明るさに
- 19 後戻りするもまたよし青き踏む
- 20 水温む一角獣の夢を見て
- 21 家系図に知ること多し涅槃西風
- 22 生まれ日の春泥ひかりごと跨ぐ
- 23 お嬢さんをくださいといふ大試験
- 24 八重桜すんとすんと落ちてくる
- 25 方舟に乗り込むための蝌蚪の脚
- 26 ふはふはの犬の来てゐる仏生会
- 27 一粒の雨にせはしく蝌蚪の国
- 28 おほだこに指を吸はせてみて長閑
- 29 ふらここを敵陣のごと降り立ちぬ
- 30 微睡みの牛馬に注ぐ穀雨かな
- 31 赤子よりまだまだ軽し茶摘籠
- 32 しやぼん玉地球の色の定まらず
- 33 初夏を生み出してゐる金物屋
- 34 町内に確執ありや古茶新茶
- 35 母の日の永遠といふパーマかな
- 36 葉桜の葉擦れの音をひもすがら
- 37 くしやくしやの艶書のごとき白牡丹
- 38 若葉風二股くらゐなら赦す
- 39 ふんどしの近づいてくる祭かな
- 40 ががんばよ其処は嘆きの壁でなし
- 41 嬰兒の泣き出すやうにソーダ水
- 42 子子といふ字を立てて泳ぎけり
- 43 金銀の蠅をまとひて象来る
- 44 禁断の果実のごとくゼリー食ふ
- 45 水無月のところどころに水の音
- 46 打水のあと足音の変はりけり
- 47 はんざきの肘直角に来るなり
- 48 蝉時雨もはや豪雨といふほどに
- 49 階に差しかかりたる日傘かな
- 50 花柄のハンカチーフを濡らしけり

75 団栗あをあをと駆け落ちのごとし
74 胡桃割るひとの眉間に皺の寄る
73 十月の月なき夜々のけものみち
72 重陽の日の行き逢ひの礼深く
71 仏塔の木目を深く秋の雨
70 羽根ひとつ零れてきたる子規忌かな
69 月光は紐のほどけるやうにかな
68 待宵や闇夜のやうな猫を抱く
67 間引菜の籠いつぱいの軽さかな
66 みちのくの稜線を研ぐ雁渡し
65 糸瓜やや言ひ訳のごと曲がりけり
64 鏡台が散らかつてゐる厄日かな
63 古書括る紐のゆるんでゐる残暑
62 終戦の日やよく歩きよく笑ふ
61 若禿の家系なりけり盆の月
60 八月の鳥の名前の戦闘機
59 敗戦の日の夜濯の二度洗ひ
58 捕へしを晩夏の風に戻しけり
57 大くらげ月のひかりをうらがへす
56 前線に銃後に鉄砲百合咲けり
55 チョコバナナ持つや右手にも左手にも
54 巻尺のやうにするりと蜥蜴の尾
53 葛餅の蜜ことごとく零れ落つ
52 小さき墓に小さき向日葵供へけり
51 寺涼し坊主の頭みなちがふ

76 連休の真つただなかに小鳥来る
77 つくばひや罅ひとつなき秋の水
78 しばらくは鹿臭きまま古寺巡る
79 寝返りを打たせるやうに秋刀魚焼く
80 三面鏡の角度あやふやなる夜長
81 嘘をつくやうに貼りたる障子かな
82 小鳥市抜けてノートルダムの鐘
83 鳥影も声も映して水澄めり
84 ひよんの実を出雲の風に鳴らしけり
85 ドロップの色また同じ神の留守
86 冬来たるとは電飾のタカシマヤ
87 空瓶のなかに木枯吹きだまる
88 同伴として新宿の酉の市
89 臘人の廊下軋まぬやう歩く
90 悪妻をもらつてみたし漱石忌
91 水鳥のやうにおでんの冷えてをり
92 犬の名をパウロと言へり帰り花
93 鴨川のすらすら流れ顔見世へ
94 鯨啼くからだ全部を耳にして
95 ひらひらと羽子板市についてゆく
96 恋もまた虚実のあはひ近松忌
97 にはとりの骨残りたる聖夜かな
98 歳末の築地はみだしたる酢蛸
99 本名のわからぬままに賀状書く
100 分針をまづは正して年用意